

江戸時代末期から明治時代における 「旅」と「旅行」について

石塚令子*

目次

1. はじめに
 2. 江戸時代末期までの「旅」と「旅行」
 3. 江戸時代末期から明治時代の「旅」と「旅行」
 - 3.1 江戸時代末期から明治時代前半
 - 3.2 明治時代後半
 4. おわりに
-
-

1. はじめに

本稿は、江戸時代末期から明治時代における「旅」と「旅行」について、語誌的観点から明らかにしたものである。

『広辞苑』(第五版)を見ると、「旅」は〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと。旅行〉と、「旅行」は〈徒歩または交通機関によって、おもに観光。慰安などの目的で、他の地方へ行くこと。たびをすること。たび〉¹⁾と書かれている。また、『大辞泉』(増補・新装版)は、「旅」を〈住んでいる土地を離れて、よその土地を訪ねること。旅行〉とし、「旅行」を〈家を離れて他の土地へ行くこと。旅をすること。たび〉²⁾と説明している。これらの辞書が「旅」を「旅行」と、「旅行」を「たび」と説明していることから分かるように、現在の「旅」と「旅行」の意味は、非常に類似している。両語の意味は

* 배화여자대학 일어통번역과 전임강사

1) 新村出編(1998)『広辞苑』第五版, 岩波書店, p.1669, 2814

2) 松村明監修(1998)『大辞泉』小学館, p.1662, 2795

〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉と考えてもよいだろう。

しかし、「旅」と「旅行」のそれぞれから受けるイメージには、大きな差があるように思われる。「ひとり旅」「旅芸人」が「旅行」に、「海外旅行」「社員旅行」が「旅」に置き換えられないことから明らかである。これは、和語である「旅」と、漢語である「旅行」の語種の違いによるものと考えられるが、両語の来歴から生じたとも言える。「旅」は記紀・万葉の時代から使われてきた来歴を持つ、いわゆる重みや陰影が込められている詩の言葉であるのに対して、「旅行」は明治期以降に定着し、もっぱら消費の行為を表す日常語である³⁾。また、「旅」は精神的なものを追求するような苦行である一方、「旅行」は明治期以降の交通機関の発達や交通網の充実、宿泊整備・宿泊業の隆盛があって成立するものである⁴⁾。つまり、「旅」は人生や心の世界と関連づけられる《苦しくつらいもの》であり、「旅行」はレジャーを根底として語られる《楽しく楽なもの》であると言える。

以上のような、現在の「旅」と「旅行」から来るイメージの違いは、近代における西洋文明、つまり近代文明の流入により「旅行」が日常語化した明治期に起こったと推測されるが、その詳しい過程は明らかになってはいない。そこで本稿では、近代文明の流入が本格化した江戸時代末期から明治時代における「旅」と「旅行」の様相を、語誌的観点から明らかにしていきたいと思う。

2. 江戸時代末期までの「旅」と「旅行」

江戸時代末期から明治時代にかけての「旅」と「旅行」を論じる前に、江戸時代末期までの両語の来歴を簡単に説明しておく。

「旅」という語は、記紀・万葉の時代から広く使われてきた和語である。上代、中古においては、ごく近距離の移動であっても、自宅以外の場所にいることを「旅」と言った⁵⁾。中世では「黄泉の旅」「中有の空の旅」というように使われて仏教思想と結びつき、「旅」は《遠距離の移動》を表すようになる⁶⁾。中世後期の言語実態が垣間見られる『日葡辞書』には、「旅」は「他行すること、あるいは、見知らぬ土地を歩き回ること」と書かれている⁷⁾。その後の江戸時代には、街道や宿泊施設のインフラが進みんだこと

3) 阪下圭八(1982)「『旅』という言葉」『月刊百科』231号, 平凡社, pp.7-11

4) 白幡洋三郎(1996)『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」—』中公文庫1305, 中央公論社, pp.3-10

5) 前掲書「『旅』という言葉」pp.8-10

東辻保和(2003)「『旅』の語史について」『滋賀大國文』滋賀大國文会, pp.27-31

6) 上掲書「『旅』の語史について」pp.31-32

7) 土井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店, p.594

で、庶民までもが長距離の移動を行えるようになった。とはいえ、「旅」は江戸時代末期以前までは《苦しくつらいもの》と認識されていた⁸⁾。このような《遠距離の移動》《苦しくつらいもの》を表すようになり、「旅」と言えば、人生や心の世界と関連づけられたり、人生に比喩されることにつながったものと考えられる。

一方の「旅行」は、漢文が典拠であり、初出は中古末期に変体漢文で書かれた『江談抄』である⁹⁾。中世を通して、「旅行」の用例が確認できる文献は多くはなく、文献当たりの用例数も1-3例にとどまっている¹⁰⁾。『日葡辞書』には、「Reoco. レョカウ Tabini yuqu.(旅に行く) 旅をすること,あるいは,道中すること. 文書語」と書かれている¹¹⁾。

「旅行」の意味は当時広く使われていた「旅」と同じであったが、日常語ではなかったのである。近世においても「旅行」の使用は増えるとはいえ、用例が確認できる文献や数は限られており、主に漢文訓読調などの固い文章に多く見られる。しかし、江戸幕府の行政文書には「旅行」が多く用いられており、武士階級には様々な移動の上位語として「旅行」が認識されていたと考えられる¹²⁾。また、江戸時代に多く発行された、今でいうトラベルガイド書の類にも「旅行」の用例が確認できた¹³⁾。一方、戯作や浄瑠璃の台本、俳諧などにはほとんど見られず、使われていても文献当たり1-2例に過ぎなかった。小説や台本の類には「旅行」ではなく「旅」が使われている¹⁴⁾。以上のような、中世、近世を通して「旅行」が確認できる文献は、貴族、武士、高僧が書いたものであり、「旅行」は支配・教養層に用いられる位相語であったとも言える。

- 8) 梅林寛人(2005)「芭蕉の『旅』は現代の『旅』と同じか」『日本語史探求法』シリーズ<日本語探求法> 8, 朝倉書店, pp.102-111
- 9) 『江談抄』の用例は、「取モノ返ルトテ、運財偷去其土、移異国恐思之間、常只恐爾従者之中一人妊者アリテ、於旅行ノ共生産」である。「旅行」という語の江戸時代までの来歴については、拙稿(2007)に詳しい。『江談抄』以前は、「旅行」を「たびゆく」「たびゆき」と訓読みさせたものは見られるが、「りょこう」と音読みで登場したのは『江談抄』が初めてである。
- 10) 中世期に確認できた用例を時代順に列挙すると、『吾妻鏡』、謡曲『盛久』『藤河の記』『文明本節用集』『実隆公記』、脇狂言『餅酒』『玉塵抄』『謡抄』『易林本節用集』『日葡辞書』である。
- 11) 前掲書『邦訳日葡辞書』 p.529
謡曲の解説書である『謡抄』には、「旅行ノ路 タビノ道中ヲ云ナリ」とあり、ここからも「旅行」が広く使われる語ではなかったこと、「旅」と同じ意味であったことが分かる。
- 12) 武士の書いた文献に「旅行」が確認できるものとして、『折りたく柴の記』『民間省要』『駅肝録』、内閣文庫の『弘化雑記』『天保雑記』などがあり、そのほかにも武士階級の移動を記した文献の題名として、『東海道旅行記』『丁未旅行記』といったように「旅行」が使われているものもある。
- 13) 『東国旅行談』『大坂より京都迄登船独案内』『七ざい所巡道しるべ 旅行便覧』『旅行用心集』『旅行須知』などである。
- 14) 江戸時代の小説や浄瑠璃の台本では、『伊曾保物語』『曲亭伝奇花菱児』『東海道中膝栗毛』に用例が確認でき、芭蕉の俳諧の前書きにも見られた。『東海道中膝栗毛』を例にとると、「旅行」は2例で、いずれも漢文訓読調の「累解」「附付併凡例」である一方で、「旅」は合成語を含めると53例にもものぼる。解説書の類では、歌舞伎の『役者論語』と俳諧の『三冊子』に、辞書類では『書言字考節用集』に用例が見られた。

3. 江戸時代末期から明治時代の「旅」と「旅行」

3.1 江戸時代末期から明治時代前半

江戸時代末期からは、西洋文明の流入により、〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉にも、関所の撤廃、人力車や馬車、汽船や鉄道といった新たな移動手段の登場による社会的変化が起こった。

「旅」は明治時代に入っても、戯作といった庶民層に愛読されていた文献に見られる。次にその例をあげる。

しか ふんめいかいわ たび むかし かは ばんこくせかい しんるいづきあい をか
 ○然しかハあれども文明開化の旅たびハ往古むかしに異りて。万国世界ばんこくせかいも親類しんるいづきあい附合。さるからに。陸をかに
 じやうきしや うみかは じやうきせん きかい そな じこく には めぐ ごと
 ハ蒸気車海河じやうきしやにハ。蒸気船じやうきせんの器械きかいを備へ。自国じこくハ庭中にはを巡るが如く。【仮名垣魯文『万国航海 西洋道中膝栗毛』初編 上(明治3-9・1870-76)】¹⁵⁾

たび ものう まし つえ ほしら ろぎん うば せつ むね
 ○さなきだに旅たびハ物憂きものなるに況て杖ものうとも柱ましともたのみし路銀つえを奪ほしらハれていとゞ切なき胸ろぎん
 うちなほ き こころは
 の内猶うちなほさら気うちきに心弱こころはり【久保田彦作『鳥追阿松海上新話』上之卷第一回(明治11・1877)】¹⁶⁾

いちまつ あくじ もの し たび ふうふ せいやく かれ とも ふるさと たちかへ やうふ わび
 ○市松いちまつが悪事あくじある者ものとも知らしず旅たびにて夫婦ふうふの誓約せいやくなし渠かれと共に故里ともに立帰ふるさとり養父たちかへに詫やうふびん
 とせしなどを【仮名垣魯文『高橋阿伝夜刃譚』六編下之卷(明治12・1878)】¹⁷⁾

しよじゅん それ よ しう がは じようきせん かはぐち しゆつばん ゆえこれ びんせん もの
 ○五月初旬しよじゅんの某それの夜よハ九州通しうひの蒸気船がはが川口じようきせんよりして出帆かはぐちする故しゆつばん是ゆえに便船これなさん物びんせんと
 たみ たび ようい といの
 お民たみハ旅たびの准備よういを整へ【古川魁蕾『浅尾よし江の履歴』(明治12・1878)】¹⁸⁾

以上のように、庶民層を対象にした文献には「旅」が多く見られるが、これらには「旅行」の用例は確認できなかった。つまり、庶民層は「旅」という語については、馴染みがあったが、「旅行」は知られた語ではなかったということである。また、『鳥追阿松海上新話』には「旅ハ物憂きものなるに」とあることから、「旅」を《苦しくつらいもの》ととらえて

15) 仮名垣魯文(1966)「万国航海西洋道中膝栗毛」『明治開化期文学集(一)』明治文学全集1, 筑摩書房, p.4, 用例は現代表記に統一して提示した。以下同様。

16) 久保田彦作(1966)「鳥追阿松海上新話」上掲書『明治開化期文学集(一)』p.375

17) 仮名垣魯文(1967)「高橋阿伝夜刃譚」『明治開化期文学集(二)』明治文学全集2, 筑摩書房, p.45

18) 古川魁蕾(1967)「浅尾よし江の履歴」上掲書『明治開化期文学集(二)』p.305

いたことが分かる。

一方の「旅行」は、江戸時代末期までは確認できる用例が「旅」に比べると圧倒的に少なかったが、江戸時代末期からは旧武士階級である教養層が書いた公的な文書や、遣外使節の報告書、西洋の事情を記した文献、思想・啓蒙書、翻訳書、対訳辞典などの西洋と関わりがある文献に大量に確認できるようになる¹⁹⁾。旧武士階級は漢文の素養があったため、明治の公用文や翻訳書などの文献に漢語を多く用いたが、「旅行」もその例に洩れない。これらの文献には「旅」はほとんど確認されなかった。

知識階級が書いた文献の中に見られる「旅行」には、いくつかの特徴がある。

まず、《公的なもの》という認識である。明治政府が樹立されると、江戸時代からの「旅行」が持つ公的な認識が引き継がれ、法令や届、願、布達といった公的な文書に「旅行」が使われるようになる。次のような例である。

○規則

- 一、海外旅行中、御国人に出会候はゞ、仮令不相知ものに候とも互に相親み、
【「海外行免状之儀」(明治2・1869・4月制定)『横浜報知もしほ草』(明治3・1870・1月13日付)に掲載】²⁰⁾

りよかう

○旅行届

身分 何某

今般私儀御用家用何候ニ付某地へ明幾日出立仕度此段御届申上度候以上【『確証文例』三編 公用之部 (明治7・1874)】²¹⁾

○内務省丙第四十四号 八年七月十八日

本月二日相達候外国人内地旅行届出候節相渡候
(中略)

別紙 第 号

外国人旅行免状

国籍 性別 寄留地名 旅行趣意 旅行先及び路筋 旅行期間 旅行期限

右ハの保証ヲ以前掲載ノ場所へ旅行致度旨申立差許候条道筋無故障相通可 申事
【『現行警察法規』(明治8・1875)】²²⁾

19) 江戸時代末期から明治時代における「旅行」という語については、拙稿(2006)に詳しい。

20) 中山泰昌代表編(1934)『新聞集成 明治編年史』第一巻、財政経済研究会、pp.323-324

21) 本木貞雄(1874)『確証文例』三編、巢枝堂、pp.27-28

22) この用例のように、当時、居留地以外の外出を認められていなかった外国人が、日本国内をくつむ土地を離れて、一時他の土地へ行くことについて、「旅行」または「内地旅行」としている。例えば、『通信全覧』第二編類輯第七十一(1860年)には、イギリス人公使のオールコックの私記や幕府の役人とのやり取りを日本語に翻訳した幕府の行政文書があるが、「余私用にて出て遊心保養の為に旅行するなれば」というように、私的な外

○明治十二年七月二十九日

丁第十号(八月十日) 大審院 裁判所 府県

不二麻呂麻呂儀賜暇旅行中司法大輔細川潤次郎へ省務代理ヲ囑シ候条此旨相達候事【『法令大全』 第十六冊(明治十四年)司法省布達(明治12・1879)】²³⁾

江戸時代の封建的な政治・社会制度下での「旅行」とは違い、当時の日本が近代国家を志向した結果、「旅行」が近代的政治・社会制度下における〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉を表すようになり、また、《公的なもの》であるというイメージが付随するようになったと考えられる。

次に、明治時代前期において、公用文以外に「旅行」の用例が数多く確認できたのが、遣外使節団の報告書、思想・啓蒙書、翻訳書、対訳辞書といった、旧武士階級を中心とした知識層が読み書きした文献である。

江戸時代末期から明治開化期にかけては、西洋諸国への遣外使節団の派遣が相次いだが、これらを「旅行」としている。

○乃ち此条は去る文久辛酉の年余か欧羅巴に航して現に聞き見せし所のものを手録し傍ら経済論等の諸書を引て編集するものなり但し吾欧羅巴の旅行と雖ども、僅か期年を踰へざれば、固より観光のみにして、詳に彼国の事情を探索するに暇あらず【福沢諭吉『西洋事情』初編 卷之一「小引」(慶応2・1866)】²⁴⁾

○旅行の荒増 去々八月廿七日日本ニ西洋九月之事ニより当政府の案内にてエンゲラント、スコットラント之両部左之所々に滞留致し其最寄にて有名の場所官府商会製造所貴族豪族の私宅古城古寺山水の風景まで日々寸隙もなく巡歴し暫く五日前に当地まで罷帰候【岩倉具視「欧米巡回之節岩公御書簡」(明治5・1872・9月)】²⁵⁾

また、自らが西洋に赴くことだけではなく、渡航先で実際に見聞したり、洋書などから得た西洋での〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉を表す際にも「旅行」を用いている。

○西洋にても数十年前までは、今の如く鉄道の設けも無く、富貴の人は自分所持の馬車を用ひ、其外は乗合車にて旅行したり。日本の駕籠又は歩行に比すれば、遙かに便利なれども、費用も少なからず、時日も費やし、不便の事ありに、(中略)今は国中の

出を「旅行」としている。明治に入ると、外国人の居留地以外の外出は「内地旅行」という語として取り上げられ、社会的な関心事となる。

23) 内閣官報局(1881)『法令大全』第十六冊, 内閣官報局, p.914

24) 福沢諭吉(1898a)『西洋事情』初編, 卷之一, 『福沢全集』第一卷, 時事新報社, p.9

25) 日本史籍協会編(1927)『岩倉具視関係文書』第二, 日本史籍協会, p.215

鉄道恰も蜘蛛の糸を張りたる如くにて、更に旅行の労も無く、数百里の路を往来するも猶隣家に行くに異ならず、其便利実筆紙に尽すへからず。【三又漁史編『万国新話』巻一（明治元・1868）】²⁶⁾

- 旅行の法則も亦、厳ならざる可らず。昔日は旅行する者、皆馬に乗り、徐々に往來して人を害せしことなき故に、其法則を設くるにも及ばざりしなれども、蒸気車の未だ世に行はれて以前はロンドンよりエジンボルフ(スコットランドの都府なりロンドンの北西三百三十七里に在り)まで旅行する十四日を費やせしが今蒸気車に乗れば十二時の間に達し其便利も亦極ると云ふべし【福沢諭吉『西洋事情』外篇卷之二(明治元・1868)】²⁷⁾

以上の用例は、汽船や鉄道に代表される近代文明の利器を利用した〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が、時間の短縮や空間的拡大をもたらし、その結果、江戸時代末期まで主な移動手段であった徒歩よりも、格段に便利になることを強調し、このような移動を「旅行」と表現している。

また、江戸時代末期から明治開化期において規範としていた、西洋での近代的な政治・社会制度のもとで行われる〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉についても「旅行」としている。

- 若しミニストル本国其外へ旅行いたし折合不申時は、代わりとして書記官参会に罷出候通例に有之。【福田作太郎『英国探索』「ミニストルのこと」(文久2・1862)】²⁸⁾

- 議事官の給料は両院共に一人に付一日八「ドルラル」と別に旅行の雑費として二十人毎に八「ドルラフ」を与へ両院の上席は一日に十六「ドルラフ」を与ふ【福沢諭吉『西洋事情』初編 卷之二(慶応2・1866)】²⁹⁾

以上のような、西洋での汽船や汽車など交通機関を利用したり、西洋の近代的な政治・社会制度下で行われるような〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉は、近代化を目指す日本が描く理想の移動形態として考えられていたと推測できる。従って、このような移動形態を表現する際に「旅行」を用いることで、「旅行」に《新進的なもの》というイメージが付加されたのである。また、自らが先進国である西洋に赴くことについても

26) 三又漁史編(1928)「万国新話」『明治文化全集』第十六卷、外国文化編、日本評論社、p.95

27) 前掲書「西洋事情」(外篇 卷之二) pp. 43-44

28) 福田作太郎著、松沢弘陽校注(1974)「英国探索」『西洋見聞集』日本思想大系66、岩波書店、p.489
「ミニストル」とは、首相のことである。

29) 前掲書「西洋事情」(初篇 卷之二) p. 13
「ドルラフ」とはドルのことである。

「旅行」としたことについては、《新進的なもの》を体験し、吸収するために、〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が「旅行」であると考えられていたからではないだろうか。

また、「旅行」は〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉を意味する西洋語の訳語としても使われるようになる。

西洋の対訳辞書では、オランダ語の『和蘭字彙』（安政2-5・1853-55）で、‘reis’‘reisen’を「旅行」としたのが最も早い。その後、出版が相次いだ英語やフランス語の辞書に「旅行」が確認できるようになる。英語では、『英和对訳袖珍辞書』（文久2・1862）、『和英語林集成』初版（慶応3・1867）、『改正増補 和訳英辞書』（明治2・1869）、『附音挿図英和字彙』初版（明治6・1873）に「旅行」が見られたが、これらの辞書には、‘itinerate’‘journey’‘travel’‘voyage’といった語の訳語として「旅行」が使われている。フランス語の対訳辞書では、『仏語明要』（元治元・1864）、『官許仏和辞典』（明治4・1871）に‘voyage’の訳語として「旅行」があてられている。これらの対訳辞書には、「旅行」だけではなく、「旅」も訳語として採録されている。次に、「旅」と「旅行」が訳語として採録されている西洋語を辞書別に列挙する。

○桂川甫周『和蘭字彙』（1853-55・安政2-5）】

reis. z.s. togt 旅

Oen large reis 長旅

Op reis gaan 旅行スル

reisen. g.m.op reis rips 旅行スル

reizeiger. 旅行スル人

Ky gaat naan Frankryk reizen 旅行スル事ヲ好テ居ル³⁰⁾

○【堀達之助『英和对訳袖珍辞書』（1862・文久2）】

Absentee, Absenter, s 旅行杯ニテ居ラヌ人

Itinerant, *adj* 旅行スル. 遍歴スル.

Itinerate-ed-ing. *v.a.* 旅行スル. 遍歴スル.

Journey, s. 旅

Journey-ed-ing. *v.a.* 旅行スル

Trips. s. ツマヅキ. 過チ. 小旅.

Voyage, s. 船行. 旅

Voyage-ed-ing, *v.n. et a.* 旅行スル. 渡海スル.³¹⁾

30) 桂川甫周著, 杉本つとむ解説(1974)『和蘭字彙』 第IV冊, 早稲田大学出版部, pp.2496 - 2498

31) 堀達之助著, 惣郷正明解説(1973)『英和对訳袖珍辞書』 秀山社, pp.5, 428, 433, 845, 848, 920

○【ヘボン『和英語林集成 英和の部』初版（1867・慶応3）】

JOURNEY, Tabi; riyoko.

TRAVEL, v. Aruku ; Tabi szuru; yureki szuru; henreki szuru; hemeguru

TRAVEL, n. Tabi.

TRAVELING, Ryoko, tabi. 32)

○【柴田昌吉・子安峻『附音挿図 英和字彙』初版（1873・明治6）】

Excursion, n. 吟行、行錯、過度、行旅

Itineracy, n. 旅行スル^{リヨコウ}ヲ、遍歴スル^{ヘンレキ}ヲ

Itinerancy, n. 旅行、遍歴

Itinerat. a. 旅行スル、遍歴スル、吟行^{サマヨ}フ

Itinerary, a. 旅行ノ。遍歴ノ

Itinerante, vi.; Itinerated, pp.; Itinerating. ppr. 遍歴スル、旅行スル、漂泊^{ヘイハク}スル

Journey. n. 旅行^{リヨコウ}

Journey vi. 旅行スル

Journeying ,vi; Journeyed, pp.; Journeying, ppr. 旅行スル^{タビヅル}ヲ

Journey-bated, a. 旅疲シタル

Journeying. n. 旅行スル^{リヨコウ}ヲ

Travel, vi.; Travelled, pp.; Travellig, ppr. 行ク、歩ム、通ル、旅行スル^{ユ アユ トホ リヨコウ}

Travel, n. 旅行歩行^ホ

Travels. 旅日記^{タビ ニツキ}

Travelled, a. 旅行シタル

Travelling, a. 歩ム。旅行^{タビヤツル}ル

Travel-stained, a. 旅憔悴タル 33)

32) ヘボン著、飛田良文・李漢燮編(2001)『和英語林集成』初版・再版・三版対照総索引, 第三卷, 港の人, pp.206, 369

33) 柴田昌吉・子安峻著、惣郷正明解題(1975)『附音挿図 英和字彙初版』図書刊行会, pp.345, 587, 597, 1221

- 【村上俊英『仏語明要』(1864・元治元)】
 Trajet, *m.* 渡シ越スヲ.山ヲ越ルヲ.旅行スルヲ
 voyage, *m.* 旅行
 voyager, *v.n.* 旅行スル
 voyageur, *euse, m. et f.* 旅行スル人、女
 voyagiste, *m.* 旅好き³⁴⁾

ちなみに、『和英語林集成 和英の部』(初版・1867・慶応3)では、「旅」と「旅行」は次のように説明されている。

- TABI タビ 旅 *n.* A journey, traveling: -ye yuku, to go on a journey; -no hito, a traveler; -no sumai, a place of sojourn; -wa michizure yo wa nasake(prov.), the best thing in traveling is a companion, in the world kindness.
 RIYO-KŌ, リヨカウ, 旅行, (tabi yuku) To go on, to travel : - suru .³⁵⁾

「旅行」の説明として「tabi yuku」と書かれているのは、「旅行」が一般にはほど知られていなかったため、その漢字の持つ意味を分かりやすく示そうとしたからではないだろうか。また、対訳辞書に影響を与えたというロブシャイドの『英華字典』(慶応2-明治2・1866-69)には「旅行」は見られないことから、近代における「旅行」は、中国からの影響は受けていないと考えられる。

翻訳書においても、まずオランダ語の訳書に「旅行」の用例が見られ、その後、英語など他の言語の文献に散見されるようになる。翻訳書には訳語として「旅」はほとんど使われていない。以下はその一部である。

- 我等儀先達にて本宅へ可帰と存じ、ブ村の方へ罷越候(中略)右旅行中ヨンケルを殺し候者を見出し候。【神田楽山訳『和蘭美政録』文久元・1861)】³⁶⁾
 ○実に世界を挙て亜人の如く、僅少の貯を以て旅行する者なし。亜人は、四千里の道を遠とせずして旅行すること、猶和蘭人の僅かにアルンヘムの旅行を為が如し。【箕作阮甫訳『玉石志林』(文久年間)】³⁷⁾

34) 村上俊英著, 富田仁解説(1975)『仏語明要』巻之四, カルチャー出版, pp.64, 82

35) 前掲書『和英語林集成』第二巻, p. 277, 480

36) 神田楽山訳, 吉野作造他編(1927)『和蘭美政録』『明治文化全集』第十四巻, 翻訳芸芸編, 日本評論社, p.10

37) 箕作阮甫訳, 吉野作造他編(1928)『玉石志林』『明治文化全集』第十六巻, 日本評論社, p 81

○故ニ国中ヲ旅行シ処々人民ノ情ヲ察シ、又他邦に歴遊し、ソノ知識ヲ広ケリ。【中村正直訳『西国立志編』第四編(明治3・1870)】³⁸⁾

○朋友ふたり連立て旅行せしが、山路にて熊に出逢たり。【渡部温訳『通俗伊蘇普物語』第三十六(明治6年・1873年)】³⁹⁾

○志茂重街一巨屋ノ門前ニ一輛ノ馬車行李ヲ戴セテ将サニ発セントス。知ル是レ此家ノ主人旅行スルナルヲ。【丹羽純一郎訳『欧州奇事 花柳春話』第六十章(明治11年・1878年)】⁴⁰⁾

○拙者ハ愈唯今ヨリ発程致スナレバ持参ノ旅行証へ各地ニ於テ領事ノ検印ヲ乞ヒ請ケ帰国ノ上諸君ノ監檢ニ具スヘシト聞テ【川島忠之助訳『新説八十日間世界一周』第四回(明治10-13・1880-83)】⁴¹⁾

翻訳書の中で注目に値するのが、明治10年代に起きたフランス人作家ヴェルヌの翻訳小説に「旅行」を題名に冠したものが登場することである。これらの小説は、日本人が未だ体験したことがない未知なる空間への移動を小説にしたものである。題名に「旅行」を使用したのは、「旅行」という語が持っている《新進的なもの》というイメージが新奇な物語に適していると考えられたためであろう。次にその例を引く。

○今我旅行セントスルハ唯タ九十七時ナリ諸君ハ両球相距ツルノ間最モ遙遠ナルヲ驚キ我等ノ別世界旅行ヲ以テ恰カモ暴夜物語の怪談ト均シク思ヘリ【井上勤訳『九十七時二十分 月世界旅行』第五卷(明治13年・1880)】⁴²⁾

○力と越歴気の光りに籍りて地底を旅行巡視するより外に策なかるべしとて終に地底旅行と企つるに至りしハ実に奇想天外より落ちたりと云ふべけれ【三木貞一・高須治助訳『拍案驚奇 地底旅行』第一回(明治18・1885)】⁴³⁾

38) 中村正直訳(1894)『西国立志編』博文社、p.150

39) 井上勤訳、吉野作造他編(1927)「通俗 伊蘇普物語」『明治文化全集』第十四巻、翻訳文芸篇、日本評論社、p.36

40) 丹羽純一郎訳、吉野作造他編(1927)「欧州奇事 花柳春話」『明治文化全集』第十四巻、翻訳文芸篇、日本評論社、p. 164

41) 川島忠之助訳(1968)『新説八十日間世界一周』(前編) 秀選名著復刻全集、近代文学館、p. 36

42) 井上勤訳(2002)「九十七時二十分月世界旅行」『井上勤集』 明治翻訳文学全集《翻訳家編》3、大空社、p. 222

43) 三木貞一・高須治助訳(1885)『拍案驚奇 地底旅行』九春堂、p. 2

また、次の用例からは、「旅行は」主に《男性がするもの》というイメージもあったことが分かる。

○よく見れハソーエ氏なり、又其側に年老たる婦人ありて(中略)貴官の妻女など軽々敷旅行せんとハ思もよらざる事なれハ、予更に此人なりとハ知らざりしなり、【木村喜毅『奉使米利堅紀行』(万延元・1860・4)】44)

○女子のみにて旅行することは稀なれば、父兄又は、夫等を伴ふさま、又は宰領等を召連る、意味を含みて認むる事肝要なりと知るへし【中村秋香編『小学女子書簡文梯』卷之三(明治15・1882)】45)

「旅行」が《公的なもの》であり、汽車などの新しい交通機関を利用した《新進的なもの》を意味したが、そのような移動は一般的に男性がするものであったのと同時に、女性が遠出するということが、倫理的に許されていないということも関係あるだろう。ちなみに、先に示した戯作『浅尾よし江の履歴』の用例には、「九州通ひの蒸気船が川口よりして出帆する故是に便船なさん物とお民ハ旅の準備を整へ」46)とあり、女性の遠出について「旅」が使われている。

以上のように、江戸時代末期から明治時代初期には、「旅行」は、公用文や西洋の事情を記した文献、遣外使節団の報告書、思想・啓蒙書、翻訳書に多く見られるようになるのである。明治時代前半の「旅行」という語の使用は、近世に比べると格段に増えたと言える。しかし、「旅行」が確認できた文献は、主に公用文や知識層が読み書きした文献に限られていることを考えると、依然として、知識層が使用する位相的な性格が強い文書語であったと言える。漢語の知識が乏しい一般庶民にとっては、「旅」は日常語であったが、「旅行」はそうではなかったと考えられるのである。それは、福沢諭吉が当時、漢語に馴染みのない者にも理解しやすいように、漢語の多くにルビをふっていることから明白である。『西洋旅案内』には、以下のように「旅行」に「たび」を当てている。

○其外欧羅巴の諸国には蒸気車の路縦横に互り旅行すると杖笠草鞋の用意にも及ず【福沢諭吉『西洋旅案内』卷之上(慶応3・1867)】47)

このように、日常語として認知度が高い「たび」とルビをふることによって、一般には普及

44) 木村喜毅著、日米修好通商百年記念行事運営会編(1961)「奉使米利堅紀行」『万延元年遣米使節史料集成』第四卷、風間書房、p. 33

45) 中村秋香編(1882)『小学女子書簡文梯』卷之三、不二書屋、p.1

46) 「浅尾よし江の履歴」前掲書『明治開化期文学集(二)』p.305

47) 福沢諭吉(1898b)「西洋旅案内」卷之上、『福沢全集』時事新報社、p.1

していなかった「旅行」の意味を伝えようとしたのではあるまいか。

3.2 明治時代後半

「旅行」という語の定着は、鉄道網の拡大と共に進んだ。鉄道はまず、明治5年に新橋・横浜間において開通したが、明治20年代に入ると、鉄道による全国的な移動が可能になるまでに、鉄道網が広がった⁴⁸⁾。

このような鉄道網の拡大を背景に、明治20年代以降、楽しみのための〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉を行う者が増える。富裕層に限定されるが、別荘ブームや海水浴ブームが起き、楽しみのために〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉は、文化として認識されるようになり、これを「旅行」とした。

このような鉄道の普及は、「近県旅行」という語を生み出した。「近県旅行」とは、楽しみのために近場へでかけて行くこと⁴⁹⁾を指す語である。明治22年(1898)の1月12号の『团团珍聞』には、「弾初と吹初」という風刺漫画が掲載されている。ある見得っ張りの男が吹く法螺からは、「事務繁忙」「養痾他行」という語とともに、「近県旅行」が見える⁴⁹⁾。

また、「新婚旅行」という語は、英語の‘Honey-moon’の訳語であり、初出は明治24年11月の『都の花』第七〇号に掲載の小説「蛇いちご」の「新婚には旅行が付きもの、(中略)其の新婚旅行の際、右の偽造の件発露して伊香保の湯場にて召捕られぬ」という記述である⁵⁰⁾。このように、「旅行」は、明治20年代にある程度一般に普及していったとはいえ、「近県旅行」「新婚旅行」という行為自体が、富裕層に限られており、庶民には手の届かないものであった。また、依然としてこの時期の「旅行」には「たび」「たびだち」などのルビがふられているものも多い。

○まして結婚幾干もなく手を携え車を同して旅行し或ハ日光の奇観を見或ハ伊香保の温泉に遊ぶ【石橋忍月『一喜一憂 捨小船』第十四回(明治21・1888)】⁵¹⁾

このような鉄道の普及は学校の実地学習を可能にした。「修学旅行」という語は、明治

48) 明治20年以降は、『日本旅行独案内』(明治21・1888),『大日本汽車旅行名所図絵』(明治23・1890),『旅行必携鉄道旅客案内』(明治26・1893),『鉄道旅行各地商業案内』(明治26・1893),『東海道鉄道旅行案内』(明治27・1894),『東海道鉄道遊賞旅行案内』(明治27・1894)というように、題名に「旅行」という語を用いたガイド書が発行されるが、ここからも「旅行」という語と鉄道との深い繋がりが確認できる。

49) 湯本豪一(1998)『図説 幕末明治流行事典』柏書房, pp.236-239

50) 広田栄太郎(1969)『近代語訳語考』東京堂出版, pp.43-48

飛田良文(2002)『明治生まれの日本語』淡交社, pp.108-116

51) 石橋忍月(1971)「一喜一憂捨小船」『山田美妙 石橋忍月 高瀬文淵集』明治文学全集23, 筑摩書房 p.215

19年12月に東京師範学校が実施した長途遠足を、『茗溪会雑誌』第47号(明治19年12月)が「修学旅行」として報じたのが最初である⁵²⁾。それ以後、各地の学校で「修学旅行」と銘打った行事が開催されるようになる。次は「修学旅行」の報告書の一部である。

○修学旅行ノ目的ハ大川ヲ跋渉シ勝区靈蹟ヲ尋訪シ日常錬磨セル觀察力ヲ用キテ生平履修セル學術ヲ實際ニ徵驗スルニ在リ旅行中特ニ必要ナル学科即實際ニ徵驗シウル學術ハ地質学地理学物理学史学等トス【山本良胤編『修学旅行日記 本願寺文学寮』(明治25・1892)】⁵³⁾

学校での実地学習は、元来、軍隊の行軍訓練が発達したものであるが、陸軍でも明治18年から「参謀旅行」と称する実地演習が始まった⁵⁴⁾。また、『東京帝国大学大覧』によると、同時期に東京大学で行われた実地研究を「学術研究旅行」と呼んでいる⁵⁵⁾。このように、教育的な制度としての用語に「旅行」が使われるようになった理由として、明治時代に入り、「旅行」が公用文に使われていたため、教育面でも制度としての《様々な目的でよその土地へでかけて行くこと》に「旅行」を使用したと考えられる。古来より「旅」という語には、「かわいい子には旅をさせよ」という諺もあるように、教育的な意味を含んでいた。しかし、明治時代における「旅行」は、近代的な教育制度のもとでの《様々な目的でよその土地へでかけて行くこと》を「旅行」としており、近代社会における《教育的なもの》であるというイメージが生まれたものと思われる。また、江戸時代末期から明治時代前期にかけての西洋文明との関わりにおいて、「旅行」が新進的なものを体験し、吸収するための〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉であるという認識からの流れもあるだろう。このような考え方は、次の用例からもうかがうことができる。

りよこう りえき くわいらく かわゆ まこと いみ こと
○旅行には、利益もあり、快樂もあり。諺に可愛き子には、旅をさせよとは洵に意味ある言
りよこう いろへ けいけん しゆへ きやうん あた だんし かぎ
ぞかし。旅行は、色々の経験を与ふ、種々の教訓を与ふ。旅行は男子のみ限るもの
ふじん おんけい あづ
かは。婦人亦旅行の恩恵に預からねばならぬなり。(【徳富猪一郎「旅行」『家庭小訓』(1896・明治29)】⁵⁶⁾

52) 前掲書、『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」一』 pp.113-115

53) 山本良胤編・発行(1982)『修学旅行日記 本願寺文学寮』 p.1

54) 参謀旅行演習本部部員編(1886)『参謀旅行記事一般之部』陸軍文庫, p.1

55) 帝国大学編 (1896)『東京帝国大学大覧』丸善商社書店, p.120

56) 徳富猪一郎(1896)『家庭小訓』国民叢書 第九冊, 民有社, pp.112-114

○旅行の説

りよこう 旅行なるものは少年にとりては一種の教育なりけいいく 老者にとりてハ一種の閱歴なりえつれき 【森田思軒
訳「西文小品旅行の説」報知叢話(明治24・1891・4月5日)】⁵⁷⁾

○自然は一大詩巻なり。旅行は活きたる学問なり。【中内蝶二『学生必読 旅行之友』
序(1902・明治35)】⁵⁸⁾

以上のように、明治20年代には、社会制度や文化として「旅行」という語が用いられたため、一般における「旅行」の認知度は急速に高まったと思われる。このような「旅行」の定着は、当時、編纂が始まった国語辞典の多くに「旅行」が見出し語として採録されていることからもうかがえる⁵⁹⁾。以下は、それらの一部の辞書の「旅」と「旅行」の記述である。

○たび(名)|旅| 家ヲ出デテ遠キニ行き途中デアルヲ。家ヲ離レテ一時他郷ニ在ルヲ。

りよ-かう(名)|旅行| 旅ニ出デ行クヲ。【大槻文彦『日本辞書 言海』(1888-1891・明治22-24)】⁶⁰⁾

○たび(第二上) 名。{(旅)} 家ヲ出テ途中でアルコト=家ヲ離レテ他国ニアルコト。-「たびニアレバ椎ノ葉ニ盛ル」。

りよ・かう((…第三コ))(全平) 名。{旅行}字音。|| 旅スルコト。【山田武太郎『日本大辞典』(1892-1893・明治25-26)】⁶¹⁾

57) 森田思軒(2002)「西文小品 旅行の説」『森田思軒集 I』 続 明治翻訳文学全集、《翻訳家編》5、大空社、pp.275-278

58) 大内徳亮(1902)『旅行之友』文光堂、p.1

59) 飛田良文・松井栄一・境田稔信編(1994-2003)『明治期国語辞書大系』全26巻、大空社
『明治期国語辞書大系』所収の普通語辞書のうち、「旅行」が見出し語として採録されていたのは、『漢英対照 いろは辞典』(明治21年・1888)、『ことばのはやし』(明治21年・1888)、『日本辞書 言海』(明治22-24・1888-89)、『日本大辞典』(明治25-26・1892-93)、『増訂二版 和漢雅俗 いろは辞典』(明治25-26・1892-93)、『日本大辞林』(明治27・1894)、『帝国大辞典』(明治29・1896)、『日本新字林』(明治30・1897)、『ことばの泉』(明治31-32・1898-99)の9冊であった。「旅行券」または「旅行免状」が見出し語として扱われていたのは、『和漢雅俗 いろは辞典』(明治21-22・1888-89)、『増訂二版 和漢雅俗 いろは辞典』(明治25-26・1892-93)、『ことばの泉』(明治31-32・1898-99)の3冊であった。

60) 大槻文彦著・発行、飛田良文・松井栄一・境田稔信編(1998)『日本辞書 言海』(『明治期国語辞書大系』[普5]) 大空社 p.617, 1072

61) 山田武太郎編著、飛田良文・松井栄一・境田稔信編(1998)『日本大辞典』上 (『明治期国語辞書体系』[普6]) 大空社 p.1020, 1369

このように、「旅行」は、明治20年代には広く知られる語となりつつあったが、「近県旅行」や「新婚旅行」という語に代表されるような、楽しみのために〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉という行為自体は、庶民には憧れであり、手の届くものではなかった。

しかし、明治30年代以降には、庶民にまで鉄道の普及が進み、誰もが〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が容易にできるようになると、「旅行」の定着は急速に進んでいく。以下の用例には、それがよく表れている。

○「はゝはゝはゝ誰も然うです。それでは以後盛にお遊びなさい。どうぞ毎日用は無いの
 だから、田舎でも、東京でも西京でも、好きな所へいつて遊ぶのです。船は御嫌です
 か、はゝあ。船が平気だと、支那から亜米利加の方を見物が傍今度旅行を為て来る
 のも面白けれど。日本の内ぢや遊山に行いたところで知れたもの。どんなに贅沢を為
 たからと云つて」【尾崎紅葉『金色夜叉』前編 第七章(明治30・1897)】⁶²⁾

○旅行も日本内地は最早何等の思慮分別をも要せぬほどに開けてまゐりました。で、鉄道や汽船の勢力が如何なる海陬山村にも文明の威光を伝える為に、旅客は何の苦なしに懐手で家を飛出して、そして鼻歌で帰つて来られるようになりました。其の代りに、つい二三十年前のような詩的の旅行は自然と無くなつたと申して宜しい、イヤ仕様といつても出来なくなつたのであります。【幸田露伴『旅行の今昔』(明治39・1906)】

上の用例からは、楽しみのための〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉を誰もが容易に出来るようになり、それを「旅行」としていることが分かる。西洋で行われていた近代文明の恩恵に預かった〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が、明治30年以降には日本でも実現されたことにより、理想が現実となったのである。この時期に「旅行家」「旅行着」「旅行癖」「旅行費」などの派生語や、「無銭」「徒步」「野宿」「帰省」「貧乏」「避暑」「野宿」「冒険」といった多様な語と「旅行」の複合語が大量に使われ始めたことが、「旅行」の使用増加を促した面もあるだろう⁶³⁾。

また、この時期には、「旅行」が近代文明の恩恵に預かったものであるという認識とともに、「旅行」と同様に〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉の上位語として使

62) 尾崎紅葉(1965)「金色夜叉」『尾崎紅葉集』明治文学全集18, 筑摩書房, p.148

63)これ以前にも、例をあげるなら、「東海道旅行」「海外旅行」「鉄道旅行」「旅行中」「旅行券」といった派生語や複合語が多かったが、明治30年以降にはそれが目に見えて増える。「旅行」が、造語力が強い漢語であったことも、定着を促進した一因であろう。

われてきた「旅」との間に明確な意味の差が生じた。

○古人の紀行

編者白す、馬の背、輿の中、或るは金剛杖に助けられて、旅は憂いものつらいものと
、道中の胡麻の灰、旅籠屋の蚤虱に、しみじみ旅愁を感じながら、心細くも旅行せし
昔と、汽車、汽船、人車、馬車、眠りながら旅行のできる今と、其古今の様を比較も
し、【大橋又太郎編「古人の紀行」『旅行案内』】日用百科全書 第十四編
(明治29・1896)】64

○旅をうきものと思ひしは、行くに車なく、汽車なく、宿るに旅店なく、野末に行きくれて、草
を枕とせし昔の事也。今や汽車并到る処に通じ、電気鉄道もあれば、馬車もあり、人
力車もあり。旅店、温泉宿も到る処にありて、普通の人の住める家よりは大にして且つ
美なり。少し茶代をはり込めば、大に歓迎せらる。今の世豈に旅行ほど気楽なものあら
むや。【大町芳衛「旅行」『続学生訓』(明治35・1902)】65

上の用例からは、旅は《苦しくつらいもの》であり、「旅行」は《楽しく楽なもの》である
ということが分かる。柳田国男も大正13年に行われた「旅行の進歩及び退歩」という演説で
次のように語っている。

○即ち旅はういものつらいものであった。以前は辛抱であり努力であった。(中略) 楽しみ
の為に旅行をするやうになったのは、全く新文化の御蔭である。【柳田国男「旅行の進
歩及び退歩」(大正13・1924)】66

つまり、「旅」にはもともと《苦しくつらいもの》であるという認識はあったが、新たに「旅行」
が明治時代に定着したことによって、「旅行」の《楽しく楽なもの》という認識と対比
するようになったのである。そして、だれもが簡便に〈住む土地を離れて、一時他の土地へ
行くこと〉を楽しめるようになると、次第に「旅行」という語の西洋の影響を受けた《新進的
なもの》というイメージは薄れていき、現在のような《楽しく楽なもの》が「旅行」であるとい
う日常語として定着したと考えられるのである。《男性がするもの》というイメージは無くなり、
《公的なもの》、近代社会における《教育的なもの》というイメージについても、明治の頃
よりは弱まったが、「修学旅行」「研修旅行」「視察旅行」という語が現在も使われて

64) 大橋又太郎編(1896)『旅行案内』日用百科全書, 第十四編, 博文館, p.1

「しみじみ」の「じみ」は原文では繰り返し記号である。

65) 大町芳樹(1902)「旅行」『続 学生訓』 博文館, p.113

66) 柳田国男(1964)「旅行の進歩及び退歩」『柳田国男集』第二十五巻, 筑摩書房, p.111

いることから分かるように、社会制度や教育制度の語として「旅行」は定着している。

4. おわりに

ここまで「旅」と「旅行」について、江戸時代末期から明治時代を中心に見てきた。では、なぜ江戸時代末期から明治時代に「旅行」が使われるようになり、「旅」と「旅行」のイメージに差が生じるようになったのだろうか。

江戸時代末期からの西洋文明の流入により、〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉は、それまでの《苦しくつらいもの》から、鉄道を代表とする新しい移動手段の登場や宿泊設備の整備が進んだことにより、《楽しく楽なもの》になりつつあった。いわば近代文明の恩恵を受けた〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉は古くから用いられてきた「旅」では表現できずに、イメージが付加されていなかった「旅行」という漢語がそれを担うことになったのである。そして、「旅」の《苦しくつらいもの》というイメージが「旅行」の定着によって、より一層強まり、一方で、近代以降に使われるようになった「旅行」には《楽しく楽なもの》というイメージが付加されるようになったと考えられる。

現在は、〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が当然のことになり、だれもが海外まで簡便に赴くことができるようになったため、「旅」の《苦しくつらいもの》というイメージは希薄になってきているかもしれない。現在、「旅」が詩的な言葉として感じられるのは、《苦しくつらいもの》である〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉の実現が難しく、精神世界において語られるようになってしまったからであろう。

【参考文献】

- ・石塚令子(2006)「『旅行』の語誌について—江戸時代末期から明治時代を中心に—」『恵泉アカデミア』11号, 恵泉女学園大学社会・人文学会、pp.5-23
- ・_____ (2007)「明治時代以前の『旅行』という語について」『日本研究』第7輯, 高麗大学校日本学研究センター、pp.125-141
- ・梅林寛人(2005)「芭蕉の『旅』は現代の『旅』と同じか」『日本語史探求法』シリーズ<日本語探求法>8, 朝倉書店、pp.102-111
- ・阪下圭八(1982)「『旅』という言葉」『月刊百科』231号、平凡社、pp.7-11
- ・参謀旅行演習本部部員編(1886)『参謀旅行記事一般之部』陸軍文庫、p.1
- ・白幡洋三郎(1996)『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」—』中公新書1305、中央公論社、pp.3-10、113-115
- ・帝国大学編(1896)『東京帝国大学大覧』丸善商社書店、p.120
- ・上井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店、p.594
- ・東辻保和(2003)「『旅』の語史について」『滋賀大國文』滋賀大國文会、pp.27-31
- ・飛田良文(2002)『明治生まれの日本語』淡交社、pp.108-116
- ・飛田良文・松井栄一・境田信編(1994-2003)『明治期国語辞書大系』全26巻 大空社
- ・広田栄太郎(1969)『近代語訳語考』東京堂出版、pp.43-48
- ・湯本豪一(1998)『図説 幕末明治流行事典』柏書房、pp.236-239

【用例出典】

- ・石橋忍月(1971)「一喜一憂捨小船」『山田美妙 石橋忍月 高瀬文淵集』明治文学全集23、p.215
- ・井上勤訳・吉野作造他編(1927)「通俗 伊蘇普物語」『明治文化全集』第十四巻, 翻訳文芸篇, 日本評論社、p.36
- ・井上勤訳(2002)「九十七時二十分月世界旅行」『井上勤集』明治翻訳文学全集《翻訳家編》3, 大空社、p.222
- ・大内徳亮(1902)『旅行之友』文光堂、p.1

- ・大槻文彦著・発行, 飛田良文・松井栄一・境田稔信編(1998) 『日本辞書 言海』
(『明治期国語辞書大系』 [普5]) 大空社、p.617、1072
- ・大橋又太郎編(1896) 『旅行案内』 日用百科全書, 第十四編, 博聞館、p.1
- ・大町芳樹(1902) 「旅行」 『続 学生訓』 博文館、p.113
- ・尾崎紅葉(1965) 「金色夜叉」 『尾崎紅葉集』 明治文学全集18, 筑摩書房、p.148
- ・桂川甫周著 杉本つとむ解説(1974) 『和蘭字彙』 第四冊, 早稲田大学出版部、pp.2496-2498
- ・仮名垣魯文(1966) 「万国航海西洋道中膝栗毛」 『明治開化期文学集(一)』 明治文学全集1, 筑摩書房、p.4
- ・_____ (1967) 「高橋阿伝夜刃譚」 『明治開化期文学集(二)』 明治文学全集2, 筑摩書房、p.45
- ・川島忠之助訳(1968) 『新説八十日間世界一周』 (前編) 秀選名著復刻全集, 近代文学館、p.36
- ・神田楽山訳, 吉野作造他編(1927) 「和蘭美政録」 『明治文化全集』 第十四卷, 翻訳文芸編, 日本評論社、p.10
- ・木村喜毅著・日米修好通商百年記念行事運営会編(1961) 「奉使米利堅紀行」 『万延元年遣米使節史料集成』 第四卷, 風間書房、p.33
- ・久保田彦作著 「鳥追阿松海上新話」 『明治開化期文学集(一)』 明治文学全集1, 筑摩書房、p.375
- ・柴田昌吉・子安峻著 忽郷正明解題(1975) 『附音挿図 英和字彙初版』 図書刊行会、pp.345、587、597、1221
- ・徳富猪一郎(1896) 『家庭小訓』 国民叢書 第九冊, 民有社、pp.112-114
- ・内閣官報局(1881) 『法令大全』 第十六冊, 内閣官報局、p.914
- ・中山泰昌代表編(1934) 『新聞集成 明治編年史』 第一卷, 財政経済研究会、pp.323-324
- ・中村秋香編(1882) 『小学女子書簡文梯』 卷之三, 不二書屋、p.1
- ・中村正直訳(1894) 『西国立志編』 博文社、p.150
- ・日本史籍協会編(1927) 『岩倉具視関係文書』 第二, 日本史籍協会、p.125
- ・丹羽純一郎訳・吉野作造他編(1927) 「欧州奇事 花柳春話」 『明治文化全集』 第十四卷, 翻訳文芸篇, 日本評論社、p.164
- ・福沢諭吉(1898a) 「西洋事情」 初編、卷之一、 『福沢全集』 第一卷, 時事新報社、p.9、13、43-44
- ・_____ (1898b) 「西洋旅案内」 卷之上, 『福沢全集』 時事新報社、p.1
- ・福田作太郎著・松沢弘陽校注(1974) 「英国探索」 『西洋見聞集』 日本思想大系66, 岩波書店、p.489
- ・古川魁菴(1967) 「浅尾よし江の履歴」 『明治開化期文学集(二)』 明治文学全集2, 筑摩書房、p.305

- ・ヘボン著・飛田良文・李漢燮編(2001)『和英語林集成』初版・再販・三版対照総索引, 第三卷, 港の人, pp.206、277、369、480
- ・堀達之助著・惣郷正明解説(1973)『英和対訳袖珍辞書』秀山社, pp.5、428、433、845、848、920
- ・三木貞一・高須治助訳(1885)『拍案驚奇 地底旅行』九春堂, p.2
- ・箕作阮甫訳, 吉野作造他編(1928)「玉石志林」『明治文化全集』第十六卷, 日本評論社, p.81
- ・三又漁史編(1928)「万国新話」『明治文化全集』第十六卷, 外国文化編, 日本評論社, p.95
- ・村上俊英著・富田仁解説(1975)『仏語明要』卷之四, カルチャー出版, pp.64、82
- ・本木貞雄(1874)『確証文例』三編, 巢枝堂, pp.27-28
- ・森田思軒(2002)「西文小品 旅行の説」『森田思軒集 I』続 明治翻訳文学全集, 《翻訳家編》5, 大空社, pp.275-278
- ・柳田国男(1964)「旅行の進歩及び退歩」『柳田国男集第二十五卷, 筑摩書房, p.111
- ・山田武太郎編著, 飛田良文・松井栄一・境田稔信編(1998)『日本大辞典』上 (『明治期国語辞書体系』[普6])大空社, p.1020、1369
- ・山本良胤編・発行(1982)『修学旅行日記 本願寺文学寮』, p.1

要 旨

現在の「旅」と「旅行」の意味は非常に類似しているが、語から受けるイメージは、「旅」が《苦しくつらいもの》であるのに対し、「旅行」は《楽しく楽なもの》であると言える。これは語種の違いにもよるが、上代から使われてきた「旅」と、明治以降に広く普及し、日常語化した「旅行」の来歴の違いも大きい。そこで、本稿は「旅」と「旅行」について、「旅行」が広く使われるようになった江戸時代末期から明治時代を中心に語誌的観点から明らかにした。

江戸時代末期から明治時代前半の「旅」は、江戸時代末期以前と変わらず、庶民が愛読した戯作などに登場しており、日常語として広く使われていた。一方、江戸時代末期以前は支配・教養層を中心とした位相語であり、文書語であった「旅行」は、江戸時代末期になると、知識層が読み書きた文献に大量に登場し始める。鉄道や汽船の登場などの近代化との関わりの中で、《新進的なもの》《公的なもの》《男性がするもの》というイメージが付加されるが、依然として知識層が使用する位相語的な性格が強い文書語であったと言える。

明治時代後半になり、楽しむのための〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が普及していくに伴い、「旅行」は文化を表す語として普及し始め、修学旅行が制度として定着すると、《教育的なもの》というイメージも付随することにもなる。そして、明治30年以降には、庶民にまで近代化の恩恵を受けた〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉が実現されるようになると、《新進的なもの》《公的なもの》《男性がするもの》《教育的なもの》というイメージは次第に希薄になり、「旅行」は《楽しく楽なもの》であるという意識が明確なものになる。それに対比するように、《苦しくつらいもの》が「旅」であるという認識がより強まることとなる。近代文明の恩恵を受けた〈住む土地を離れて、一時他の土地へ行くこと〉は、それまでの《苦しくつらいもの》から、《楽しく楽なもの》になりつつあったため、古くから用いられてきた「旅」ではそれを表現できずに、「旅行」という漢語がそれを担うことになったと考えられる。

キーワード：旅、旅行、語誌、語の意味、意味の変化、近代化、西洋文明

투 고 : 2007. 5. 31

1차 심사 : 2007. 6. 9

2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (110-735) 서울시 종로구 필운동 12번지 배화여자대학 일어통번역과
電 話 : 02-3990-881
e-mail : reiko@baewha.ac.kr